

事後報告 セッション J 越境者の身体に引かれる国境——『国境廃絶論』と『強制送還の国際社会学』からみる移民の犯罪化  
世話人 柏崎正憲（一橋大学）

諸国家の国境・移民管理レジームの強化と拡大は、越境者の身体そのものに「国境」を引くかのような段階にまで達している。この状況を問題化する二冊の本が、2025年初頭に相次いで公刊された。ブラッドリー、デ・ノローニヤ『国境廃絶論——入管化する社会と希望の方法』（梁英聖、柏崎正憲訳）と、飯尾真貴子『強制送還の国際社会学——「ヒスピニック」系移民とアメリカのゆくえ』である。前者はおもに英国の入管政策と反入管闘争を、後者はメキシコから米国への無登録移民を題材としている。

本セッションの目的は、これらの著作の概要を著者および訳者が紹介しながら、両著に共通の文脈をなす〈国境の国内化〉や〈社会の入管化〉と呼ぶべき事態——まさに日本でも進行している——について討論することであった。オンラインも含めて約20名の参加者を得つつ、セッションは次のように進行した。

1. グレイシー・メイ・ブラッドリー、ルーク・デ・ノローニヤ『国境廃絶論——入管化する社会と希望の方法』（梁英聖、柏崎正憲訳、岩波書店、2025年）は、英国の社会学者と反入管活動家との共著であり、国境線や国境警備当局だけでなく、移民の法的地位の差別化、権利制限、監視、取り締まり、そして排除に及ぶ一連の統制をつうじた、いわば国境の国内化を問題としている。第1章から第7章までに掲げられたトピック全て——人種、ジェンダー、資本主義、取り締まり、テロ対策、データベース、アルゴリズム——が、著者たちのいう「国境化 bordering」の手段をなす。これに対して著者たちは、全編でアボリショニズムの立場からの考察と批判を展開したうえで、最終章において、国境廃絶の展望に向かう「非改良主義的改良」を提唱する。

セッションにおいて訳者の梁英聖（東京外国语大学）は、本書の重要な洞察として、入管政策それ自体がレイシズムやジェンダー規範とセクシズムを作り出していること、国家とテック企業との癒着が入管統制を新たな段階へと進めていること（テクノロジーが不正義を拡大再生産することは身元特定と排除をおこなうための口実を探している政府にはほとんど気にならない）を挙げた。だがそれにもまして重要な点として、本書が国境廃絶の立場からオルタナティヴを示したこと、すなわち、否定的な制度の不在のみならず、積極的に創出されるべき社会関係の構想としてのアボリショニズムを反入管闘争に結びつけたことを、梁は強調した。「かわいそうな特殊カテゴリー」（子どもや人身取引の犠牲者といった）を統治者に作らせるのではなく、送還の脅威に直面する全ての移民を利するような改革をつうじて、いかにして国家権力を切り縮めつつ、一般的な権利を開いていくことができるか、それを真の問題として一冊の本をもって提起したことが、本書の最大の成果である。

2. 飯尾真貴子『強制送還の国際社会学——「ヒスピニック」系移民とアメリカのゆくえ』（名古屋大学出版会、2025年）は、メキシコの先住民コミュニティに属する人々の越境と

送還をめぐる経験の分析をつうじて、移民のトランサンショナリズムと入管政策との絡みあいを浮かび上がらせた社会学的労作である。著者の飯尾は、移民のトランサンショナル・ネットワークに強制送還がどう影響しているのかを解明するためにフィールドそのものを越境的に設定した（米国カリフォルニア州およびメキシコ・オアハカ州）。本書は、移民の追放可能性 deportability がいかに移民自身のふるまい、身体性のレベルで再生産されるかを、厚みあるエスノグラフィーにもとづいて浮き彫りにした。移民を有罪性や非遵法性、そして財政負担と結びつける現代米国の「シヴィック・ネイティヴィズム」の言説が、移民コミュニティそれ自身の価値規範にすら浸透し、個々の移民自身のふるまいや状況認識を左右しているというのである。

セッションにおいて著者の飯尾真貴子（一橋大学、非会員）は、本書にまとめられた研究成果を、米国の政策の変遷に関連づけつつ、豊富な調査記録を紹介しながら解説した。越境者のさまざまな経験——隣人のまなざしへの警戒と自己規律化、行いを正せば強制送還を回避できるという信条の形成、越境の犯罪化による家族分断、故郷での被送還者のスティグマ化や世代間の意識格差と、他方での共同体への再包摂、等々——の考察をつうじて、移民の包摂と排除の境界が（米国の政策だけでなく移民送出地域の価値観にも結びつきながら）いかに再定義されていったかを飯尾は示した。だがそれでも越境者たちは、飯尾の調査協力者の言葉にあるように「ひとりの人生が他人のそれより優れていると感じたいエゴをもたらす法律」の不正義を感じ取っている。

3. 以上の報告のあと、登壇者のあいだで、またフロアから、次のような問い合わせられた。移民送出社会のモラルエコノミーは、しばしば国家や資本の統制への抵抗や異議申立ての基盤として語られる一方で、飯尾の著作はむしろ国家権力がモラルエコノミーを作り変えてしまうことに光を当てているが、この問題をどう捉えたらよいか。『国境廃絶論』は国家的な帰属をこえた権利を目標にしているが、その基盤となるような国家に回収されない共同性をいかに再構想しようとしているのだろうか。非市民を市民に包摂するのかどうかが問題である一方で、民主的な市民の形成というシティズンシップのもう一つの課題を、両書にもとづいてどう位置づけるべきか。エコロジー推進的アボリショニズムが結実するような未来を、むしろ移民排斥と環境保全の言説とが結びつきうる現状のなかで、どう考えればよいのか。等々。

これらの全てについて詳述はできないが、最後の質問に対する飯尾の回答を紹介して結びとしたい。移民をめぐる現在の論争でしばしば忘れられているのは、たとえば異常気象の影響によりグローバル・ノースからサウスに難民が押し寄せるような未来の可能性である。自分もまた越境者になり得るという想像力を喚起することが、混迷する現状の先を見出すための一つの方法かもしれない。